《眼光紙背》

第７回

三舎を避けるな

（共同通信社）竹内　健二

【日中関係】13日――江蘇省南京市の南京大虐殺記念館で追悼式典

日誌には盛り込めなかったが，昨年は1937年の旧日本軍による南京占領から80年目に当たっていた。ただ，３年ぶりに習近平国家主席が出席するも演説はせず，好転の兆しをみせる日中関係に一定の配慮を示したことは報道された通り。一方，国内では『産経新聞』が南京大虐殺を否定するキャンペーンを展開し，都内で「南京事件はなかった」と主張する日本会議系のイベントが開かれ，一部の政治家も参加するなど，歴史修正主義者たちの動きも目立った。

そうした中，12月10日付という絶好のタイミングで出版されたのが，清水潔『「南京事件」を調査せよ』（文春文庫版）だ。2015年に日本テレビのドキュメント番組として放送され，2016年に単行本化されたルポを発生80年の節目に文庫化したものだ。氏は1999年に起きた「桶川ストーカー殺人事件」を調査報道の手法で事実上の解明に導いた，知る人ぞ知る事件記者。歴史問題を扱った本ルポも，緻密な事実関係の洗い出しと，徹底した裏取りを重ね，事件の凄惨な実像に迫っている。

中でも，福島県の元兵士たちの日記，証言と南京の現場を突き合わせた検証から，南京大虐殺記念館に掲げられた油絵の描写――「日本兵の背より遥かに高く積み重なった大量の死体」の真の意味が見えた瞬間，著者とともに読者は戦慄する。機関銃の音。人が倒れ，人が積み重なっていく……，いや，本文を読んでいただいた方が良い。

南京大虐殺に関してよく知られているのは，旧陸軍将校らでつくる偕行社が会員の証言を集めて「冤罪」を晴らそうとしたところ，数多くの事実を認める証言が寄せられ「中国人民に深く詫びるしかない。まことに相すまぬ，むごいことであった」と謝罪した一件だろう（南京事件調査会編『南京大虐殺否定論13のウソ』柏書房，1999年）。

あるいは，笠原十九司『南京事件論争史――日本人は史実をどう認識してきたか』（平凡社新書，2007年）など，反対派のロジックも含めて丁寧に検証した仕事もある。従って「なかった」論が破綻しているのは学術界では常識と思うが，それでも清水氏の労作には大きな意義があるといいたい。昨年に日本でも公開されたユダヤ人歴史学者がホロコースト否定論者と法廷で闘う映画『否定と肯定』でも描かれているそうだが（残念ながらまだ観ていない），否定論者は「なかったという説もある」と提示することで，あたかも学術的に論争があり，真相は不明という印象を人々に植え付けるからだ。おまけに，そうした手合いは時代を問わずわいてくる。だから，その件は決着済みと高を括るのではなく，繰り返し，手を替え，品を替え，事実を書き続ける必要がある。

そういえば『調査せよ』は，単行本も文庫版も帯の文句は「南京事件はあったのか？　なかったのか？」となっていて，パッと見では「なかった」のトンデモ本と受け取られても仕方がないつくりになっている。直接「あった」と書けば買ってもらえないという判断かもしれないが，出版社のキャッチコピーには首をかしげたくなるものが実に多い。新年早々にはちくま学芸文庫までもが，小島毅『朱子学と陽明学』（2013年）の帯に「なぜ中国・韓国はあああなのか」と，同書の趣旨とはかけ離れた宣伝文句を付けたことを問題視され，公式ツイッターで謝罪するはめになった。

閑話休題。『調査せよ』の話に戻るが，それにしても，この著者をしても「中国人ってやつはどうしょうもないんだ」という自身の祖父から受け継いだ暗い想念と向き合わざるを得なかったとい

うことに，この島国に巣くったゼノフォビアの深さが感じられる。中国人が「どうしょうもない」の裏返しは，日本人が「すばらしい」という思い込みだろう。実際，南京大虐殺を巡っても「優しい日本人がそんなことをするはずがない」といった主張がネットを中心に幅を利かせている。

昨今の「ニッポンすごい」一点張りのテレビ番組なども影響しているのだろうが，これは国内で起きる殺人事件のほとんどが日本人同士によるものであるという単純な事実からも成り立たない感情論に過ぎない。いや個人ではなく「日本人」全体の話だと言いたい向きもあるかもしれないが，戦前戦中は集団としての「日本人」イメージもほんわかしたものではなく，いまの多くの日本人が抱いているであろう「中国人」像も違っていた。

内山完造は『中国人の生活風景』（東方書店，1979年）の中で，ある時の日中座談会で取り上げられた「中国人の日本常識」として「日本人は短気である」「日本人は陰険である」「日本人はよく人を殴る」などを挙げている。「特に中国で苦力とか車夫などの下層生活者を追いかけ回して殴っておる景色は，みているだけで冷汗を覚えるものである」。同時代者の見聞だけに重い。

これに対し「日本人の中国常識」は「平気で盗みをする」「嘘つきだ」「利己一点張りだ」といろいろあるが，暴力的だという指摘はない。

こういった見方は内山だけでなく，清末中国に滞在した宣教師のアーサー・H・スミスも，中国人の無知やら公共精神の欠如やらを散々あげつらったあげくに「和平を好む特質」も強調している（『中国人的性格』中央公論新社，2015年）。

また戦前，中国人が「食人種」であると懸命に，その博識を以て世に訴えた桑原隲蔵も，他方で「支那人は個人としても腕力沙汰は甚だ稀で，団体としても戦争は好まぬ。支那人の所謂喧嘩は喧嘩口論である」（「支那人の文弱と保守」1924年，テキストは青空文庫）と述べている。

なお，桑原は有名な「支那人間に於ける食人の風習」の中で「太田錦城が，日本では神武開闢以来，人が人を食ふこと見当らざるは，我が国の風俗の淳厚，遠く支那に勝る所以と自慢して居るが（『梧窓漫筆』後編上），この自慢は支那人と雖ども承認せねばなるまい」（1927年，テキスト同）と日本人を免罪している。しかし，カニバリズムは人類共通の禁忌（タブー）であって，この点については中野美代子氏が次のごとく痛快に喝破している。「中国人のような記録魔にかかっては，いかなる民族も三舎を避けよう。もし，日本人も中国人同様の記録魔であったとしたら，「食人年表」は中国に劣らず目覚ましいはずである」（『カニバリズム論』ちくま学芸文庫，2017年）。

ことは記録，歴史に対する執念の問題ということになり，根は南京大虐殺の真相追求にもつながっている。『調査せよ』の解説で，ジャーナリストの池上彰氏が指摘している。「都合の悪い資料はなかったことにする。廃棄処分にしてしまえば，責任が追及されることはない……2017年夏に大きなニュースになった森友学園や加計学園……後世の批判や評価に任せるために資料をきちんと取っておく。日本では，いまだにそれができていないことに気づきます」。

さて，以上から筆者が言いたいのは当然ながら「日本人は暴力的で中国人は平和的だ」ということではなく，民族の「性質」などという代物はあやふやなものであって，歴史的，政治的コンテクストによっていかようにも捉え方が変わるということだ。いかなる民族――というより人間集団も愚行に手を染める可能性を持っている。中国にとっては耳が痛いこととは思うが，文化大革命や第２次天安門事件の際の暴力もなかったことにはできない。我々にできるのは，何が起きたか，なぜ起きたかを知ることでしかなく，三舎を避けている場合ではない。清水氏が書くように「知ろうとしないことはやはり罪なのだ」。